

WILL

花田紀凱 責任編集

増刊

8月号

<http://web-will.jp>

緊急
増刊

梅澤裕少佐独占手記

総力特集

「私は集団自決など命じていない！」
大江健三郎に問う！

沖縄戦「集団自決」 狙われる 沖縄

渡部昇一
曾野綾子
田久保忠衛
櫻井よしこ
藤岡信勝
松本藤一
徳永信一
鴨野守
皆本義博ほか

2008年8月

偏向報道ウオッチング

江崎 孝
ジャーナリスト

これが 沖繩の言論封殺だ

沖繩の新聞購読者をほぼ独占する地元二紙が極端な偏向報道をすることはよく知られているが、琉球新報は沖繩タイムスに比べてまだマシだといわれていた。だが、昨年の「十一万人集会」を機に、琉球新報も沖繩タイムスと覇を競うように、異常とも思える偏向報道に発進していった。

消された沖繩戦記

昨年沖繩の宜野湾市で行われた「9・25教科書検定」は異議四を求め

県民大会(二十万人、集会)の熱

気も冷めはじめた、十月十六日付け琉球新報夕刊に、それまで中断していた「沖繩戦史特集記事」が、まるで読者の目を避けるかのように、そつと再開された。

新聞の特集記事が「読者の目を避けるかのように」という表現に違和感を覚える方もいるだろうが、琉球新報の購読者である筆者には、実際そのように感じられた。そして、それには偏向した沖繩の新聞を突撃する

ような深いわけがあった。

ことの次第を説明するため、時間を約四カ月巻き戻す。

平成十九年六月十九日は、琉球新報の長期特集記事「火曜から土曜の夕刊に連載」の第二話「パンドラの箱を開ける時 沖繩戦の記録」の掲載予定日であった。第一話「みんないなくなった 伊江島戦」が前日で終了、十九日からは第二話「慶良間で何が起きたのか」が始まる予定であった。

筆者上原正彦氏は掲載日の前、知人に「集団自決をテーマにしたもので、圧力に屈することなく執筆する」と語っていたという。

「集団自決」というテーマは地元二紙を中心に沖繩メディアが民意を煽っている最もホットなテーマのはず



彼らの思う「史実」とは? (写真提供/共同通信社)

だった。言うまでも無く慶良間とは「集団自決」に関する「軍命令の有無」が問題になっている座間味島と渡嘉敷島を含む慶良間諸島のことを指す。

だが、その特集記事は、読者に何の断りも無く、突然、中止になった。執筆者あるいは新聞社側の「お知らせ」や「弁明」等は一行も掲載されていなかった。

地元を代表する新聞が、「集団自決」に関する連載特集を突然中止したことに対して当然、いろんな憶測が飛び交った。

「新聞を中心に展開されている教科書検定運動に水をかけることになる内容になるため」とか、「編集担当者」の態度に変化があり、今回の事態に至ったらしい」とも言われた。

偏向記事で知られる沖繩紙ではあるが、連載中止という非常手段に打って出るのはよほどのことがあった

に違いない。

上原氏の連載が中止された日の朝刊、文化面トップに林博史関東学院大学教授の「沖繩戦」特集の第一回目が掲載されていた。林教授といえば日本軍を残酷非道だと糾弾するサヨク学者で、「集団自決訴訟」でも被告側の証拠を収集したことで知られている。

上原氏の記事「慶良間で何が起きたか」には、一休、琉球新報を動揺させるような内容が書かれていたのだろうか。

十月十六日、連載再開の冒頭で、執筆者の上原氏は次のように弁明をした。

「パンドラの箱」の物語の順序も身もちよつと変更を加えることにしたのでご了承をお願いしたい。だが、読者が「あつ」と驚く話が続くことには何ら変りはない」

これが沖繩の言論封殺だ

●これが沖縄の言論封殺だ

ように、戦争の持つ影の部分のみを捉えてイデオロギー問題に摺りかえる手法をとらない理由を次のように書いている。

「『鉄の暴風』等によって沖縄のマスコミがつくりあげた虚偽の神話に対する怒りを隠さない多くの集団自決当事者たちの証言に出会い、ようやく沖縄戦の真実に気がついた」

そして、「われわれが真相を知ることが『人間の尊厳』を取り戻す、すなわち『おとな』になることだと信じる」と断ったうえで、「筆者も長い間『赤松は赤鬼だ』との先入観を拭いさるることができなかったが、現地調査をして初めて人間の真実を知ることができた」と告白している。

また、「反戦平和なんてボクには関係ない」と堂々宣言し、封印されていた沖縄戦の真実の物語を追求している異色の沖縄戦研究者でもあった。

前述のように事前の予告では「慶良間で何が起こったか」を明らかにし、集団自決の真実を白日の下にさらすとのことだった。

しかし、再開した上原氏の原稿タイトルは「軍政府チームは何をしたか」であった。「集団自決」が起きた一九四五年三月下旬の慶良間を飛び越えて、四月以降の沖縄本島の米軍上陸、投降住民の管理の模様を記しており、「慶良間で何が起こったか」については触れていない。

上原正稔氏とはどんな人物か。

「沖縄戦の真実を伝えたい」

上原氏は「集団自決訴訟」の原告側と被告側の両陣営の準備書面に出てくる「沖縄シヨウダウ」の著者で、沖縄一フィート運動の創始者でもある。「沖縄戦シヨウダウ」は、平成八年六月一日から十三日にわたって琉球新報に連載されていた上原氏の沖縄戦記であり、現在連載中の「パンドラの箱を開ける時 沖縄戦の記録」はその続編になる。

「沖縄戦シヨウダウ」には、上原正稔が記載した注の中で、沖縄タイムスや琉球新報が今では決して記事にすることのない金城武徳や大城良平、安里巡査の証言を取り上げられている。その証言では赤松大尉について、食料の半分を住民に分け与えたとか、村の人で赤松大尉のことを悪く言う者はいないなどと語ったことが記載されているのである。

更に援護法を集団自決に適用するには軍の自決命令が不可欠だったので、赤松大尉は一切の釈明をせず世を去ったと記載している。

平成八年といえは「集団自決裁判」が提訴される以前であり、琉球新報も偏向しているとはいえず、上原氏のように「反戦平和なんてボクには関係ない」と言い放つドキュメンタリー作家の作品を連載する余裕があったことがわかる。

それが平成十七年の提訴、そして平成十九年の「教科書検定意見発表」を機に、琉球新報も沖縄タイムスに負けない偏向報道に突っ走って行くのである。

毎年沖縄では「慰霊の日」の六月二十三日前後になると、地元テレビがこぞって沖縄戦の記録フィルムを放映する。米軍が沖縄へ上陸したときに撮影した記録フィルムを「フィート」つまり買取って放映する「フィート運動」の実践である。

上原氏は、独自のルートでアメリカで眠っている「沖縄戦映像」を取り寄せる「一フィート運動」の創始者でもあった。

上原氏は従来沖縄戦の研究者の

「一フィート運動」は、その後、同運動に大田昌秀元知事や、新崎盛暉、安仁屋政昭、石原昌家等のサヨク学者が運営委員として加わり、運動がイデオロギー化していく。

創始者の上原氏は「一フィート運動」がイデオロギー化するのを嫌ったのか、組織を離れて独自の活動をやるようになった。

「慶良間で何があったか」を白日の下に晒そうとしたドキュメンタリー作家上原氏の連載を、琉球新報が「中止」したのは、何のためだったのか。上原氏に「何があったのか」。

「沖縄イニシアティブ」方式

平成二十年三月二十七日付け琉球新報「声」欄に次のような投稿が載った。

（県民大会論争について
浦添市 S・S・(62歳)

3月20日(の)本欄は良かった。県民大会への賛否両論が併記され、どうすべきか迷った人も結論が出せたとと思う。新聞の使命は「偏見なく真実を報道」だが、偏りがちなのも現実。その点、投稿は両論併記が簡単だ。

賛否を決めるときは多少雑拙でもそうしてもらえはと願う。(以下略)

琉球新報は時折、アリバイ作りのように自社論調にそぐわない「投稿」「寄稿」を掲載する。右のS氏は琉球新報の一見公平に見える両論併記の裏に潜む「沖縄イニシアティブ」方式という卑劣な言論封殺手段を「存知ないのだから」。

二十日の「声」欄の論争も一見両論併記に見えるが一人の投稿者を複数の反論者で塗りつぶす「沖縄イニシアティブ」方式そのものであった。

「沖縄イニシアティブ」方式の由来は後に譲るとして、最近の例では日

取真俊氏と小林よしのり氏の論争に琉球新報はこの汚い手を使った。

罵にかかった小林よしのり

その経緯を「ウイキペディア」が、次のように書いている。

「目取真は『琉球新報』でも小林を中傷。小林は自ら申し出て反論文を掲載。だが反論一回きりという条件だったため、以降は『琉球新報』と目取真のコラボによる小林中傷特集としか言い様がない些かアンフェアな状況に。沖縄に果敢う同調圧力の象徴とも見なされている」

最近発売された小林氏の著書「誇りある沖縄へ」(小学館)には、琉球新報と小林よしのり氏とのやり取りが次のように説明されている。

「だいたい、この連載には『目取真・小林論争』を中心というサブタイトルがついているけど、わしは目取真俊

への反論は一回しかさせてもらってないんだからね。

〇七年十一月三日に目取真が「風流無談」というコラムでわしを批判した後、琉球新報の記者が「何回かの連載になってもいい」と言うから反論を書くことにしたのに、書き始めた途端に「小林さんの反論は今回限りにさせてもらいます」と言ってきた。(中略)

で、わしの反論が掲載された一週間後には、目取真の再反論が紙面に載った。さらに渡名喜(渡名喜守太・沖縄紙を根城にする左翼学者)筆者注)の連載も始まった。でも、わしはもう反論させてもらえない」

このくだりを読んで、琉球新報の罵に見事に引つかかって憤慨する小林氏の姿が想像され、失礼ながら思わず吹き出してしまった。

琉球新報の常套手段を知らずにこの「論争」を読んだ読者は、おそらく

支援する沖縄紙の画策もあった。

そのために以後、沖縄の保守系学者は物言えば唇が寒い状態に置かれ、沖縄二紙は左翼学者の独占状態になる。

以上がアウトラインだが、少し詳しく説明しておく。

二〇〇〇年五月三日から十一日にかけて、沖縄タイムスに琉球大学の三人の教授(高良倉吉、大城常夫、真栄城守定)が連名で、同年三月下旬、アジア・パシフィック・アジアセンタープロジェクト(A・P・A・P)沖縄フォーラムで発表した「アジアにおける沖縄の位置と役割——沖縄イニシアティブのために」という論文を発表した。

これを読んだ沖縄タイムスOBの左翼論客、新川明氏が同紙の十六日、十七日紙面で批判ののろしをあげた。いわく、「日本国による沖縄「統

合」の歴史的な作業がいよいよ最終的な仕上げの段階に入った。

当初からイデオロギー論争に引きずりこんで袋叩きにする意図が露骨に見える。ちなみに、沖縄タイムスというホームグラウンドで「沖縄イニシアティブ」を袋叩きにした左翼知識人の面々は、新川明・新崎盛暉・仲里効・石原昌家・川満信一・比屋根照夫・目取真俊の各氏であった。

沖縄の保守派の「袋叩き」を先導した新川明氏は、沖縄タイムス記者から同社社長にまでなった人物。記者時代には本土復帰前の初の国政選挙に際し、「国政参加選挙拒否」の署名記事を連載し、波紋を広げたこともある極左思想の持ち主である。

この頃から「沖縄のサイレントマジョリティの本音」は新聞紙面から放送されるようになった。少なくとも沖縄で論陣を張ろうと思うと学者は、

次のような印象を植え付けられただろう。

「沖縄の作家や学者はすばらしい。あの論客の小林よしのりが、たった一回しか反論できず論破されたあけく尻尾を巻いて逃げたのだから」と。

沖縄紙の共同開発

では、そもそも沖縄マスコミの常套手段である「沖縄イニシアティブ」方式とは何なのか。

「沖縄サミット」を目前にした二〇〇〇年五月、六月、沖縄の新聞紙面を賑わせた「沖縄イニシアティブ」論争に端を発する。

沖縄の新聞を舞台に、沖縄の保守系学者が沖縄の将来を展望した政策論を発表したが、これを数を頼んだ沖縄の左翼学者が袋叩きにした。その論点は肝心の政策論からイデオロギー論に滑りかえられ、左翼学者を

「沖縄イニシアティブ」方式という卑劣な手段によって抹殺されることを覚悟せねばならない。

「何かを変えようとする際、反対意見が出ることは珍しいことではない。その声にしっかりと耳を傾けることで、より良い方向に改善できることは多い。その意味でも反対意見は重要である」

これは、平成二十年二月七日付けの琉球新報社説の冒頭部分である。社説が大真面目で言っているのか、それとも己の言行不一致を皮肉っているのか、筆者のような凡夫の思慮の遠く及ばないことである。

天むすたかし

一九四一年生まれ、沖縄県在住。慶応大学経済学部卒業。東京にて自営会社を経営した後、米軍占領下の沖縄で輸入業者を経て、平成十五年退職。政治団体「沖縄イニシアティブ」の設立に関与。著書「沖縄の未来を拓く」(インパクト出版会)。

WAC 話題のDVDシリーズ

「南京大虐殺」は捏造である！
 語り続けなければならない歴史の真実がここにある！！

70年の時を経て、今なお日中間係に波紋を投げかける「南京事件」。
 平成19年12月6日、東京・九段会館で行われた「南京陥落七十年国民の集い」に
 南京攻陥戦に実際に従軍した9人の元日本兵が参列した。
 そして当事者である勇士たちによって語られた「南京城攻陥」の真実。
 本作品は、その貴重な証言の全てを収録している。
 後世に語り継がなければならない歴史の真相がここにある。



参戦身
 「南京」

DVD

VHS

全国書店で発売開始

DVD仕様 WAC-D594 全93分
 VHS仕様 WAC-D594 全93分
 2008年/日本 ©WAC 定価 ¥2,990

DVD



WAC-D590 全101分
 定価 ¥3,990

●お近くの書店でお

郵便はがき

1 0 2 - 8 7 9 0

料金受取人払

題可局承認

5856

112

東京都千代田区九段南3-1-1
 久保寺ビル6F
 ワックマガジンス株式会社
 「WILL」

定期購読サービス係 行

差出有効期間
 平成20年10月
 31日まで



年齢	20代	30代	40代	50代	60代	70代~	性別	男・女
ご職業	1.会社員・公務員・団体職員 2.会社役員 3.アルバイト・パート 4.農工商自営業 5.自由業 6.主婦 7.学生 8.無職 9.その他()							
取り上げてほしいテーマがありましたら、お書き下さい								
よくお読みになる新聞・雑誌をお書き下さい								

お書きいただいたデータは、WACの資料となり、小売用以外の目的に使用することはありません。

WILL

2008年8月号増刊 (2008年8月15日発行)

編集長：花田紀凱

編集委員：大淵博善

編集部：瀬尾友子／川島龍太

梶原麻衣子

DTP：小島将輝

デザイン：WELL PLANNING

表紙イラストレーション：浅生ハルミン

発行人：鈴木一

発行所：ワックマガジンス株式会社

発売所：ワック株式会社

〒102-0074東京都千代田区

九段南3-1-1久保寺ビル

電話 03-5226-7622 (販売)

電話 03-5275-5984 (編集)

印刷所：図書印刷株式会社

WILLホームページ <http://web-will.jp>

※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

編集部から

●二〇〇八年一月号に大江健三郎氏の一番での発言を逐語で掲載。相当な時間をかけたので大江氏の思考回路に精通、というか苦し紛れの後付け論議の長話に失笑。原告側代理人の正論に、それが一般読者の立場ならショックとまで言ったので傍聴席は大爆笑。それこそ、沖縄ノート」の争点カ所を小学生の国語のテスト問題にしてみたらいいのでは。裁判官より小学生の判

断の方が正しいようです。(浦尾) ●編集部にある進行表(ホワイトボード)に冗談で「No More 徹夜」と書きました。するとそれを見た編集長が横に「Remember 徹夜」というラブレターがコリゴリだ、という思いで一丸となり立ち向かった増刊号。結果は……朝陽が眼にしみます。次こそ徹夜をせず作業があるんだっ……(川島)

は若い日本人の恥辱(昭和三十三年)との発言から、我が家では「本に書いてあることは正しい」と思っているうちは大江の本は読むべからず」というお話しが出て言われたこととは、だ、これだけで済んだ。(梶原)

●増刊号の校了日の徹夜明けは三十四回目の誕生日でした。もちろん、誕生日を一種もせず、眩しい朝陽で迎えるのは初めてのことです。しかも、そのまま仕事帰りに東京ドームへ野球観戦に馳せ参じます。ワタクシにとっては、徹夜明けで眠たくなくて、どれだけ眠が減っていたって、たとえ絶世の美女に誘われたって、野球観戦に勝るものはありません。今年もますます元気に「野球観戦」を邁進！

●WILL上 07年12月増刊号「南京大虐殺」のクラブピアで、収容所で子供たちに習字を教えている上官を「陸軍」としました(小島)

編集長から

大江健三郎氏は「選ちを改めざる、これを過ち」という論語の言葉を「存知知らし」い。

岩波書店発行の広辞苑にも「選ち」と載っているのに、選ちは誰にもあります。もっちは早い段階で、大江氏は「選ち」もよかったです。

「取材もほとんどせずに、軍命令があったと思いついで赤松大尉らに冤罪譚話を浴びせたのは、私の間違いだっ。お詫びします」

謝りたくないために誤弁を弄し、わけのわからないことを言いつけてゴマかそうとする人間として不誠実ではないでしょうか。

大江氏に「あなたの方が間違っている」とアドバイスしないまま、「沖縄ノート」の増刊を続けている岩波書店も同罪です。不誠実極まりない。